

対話を通して表現力を身につける指導の工夫

教科名 和田雅博 平山ちさと 今西千景

1. 主題設定の理由

(1) 小・中・高の国語部における「自立」と「協同」～学び合う共同体づくり～

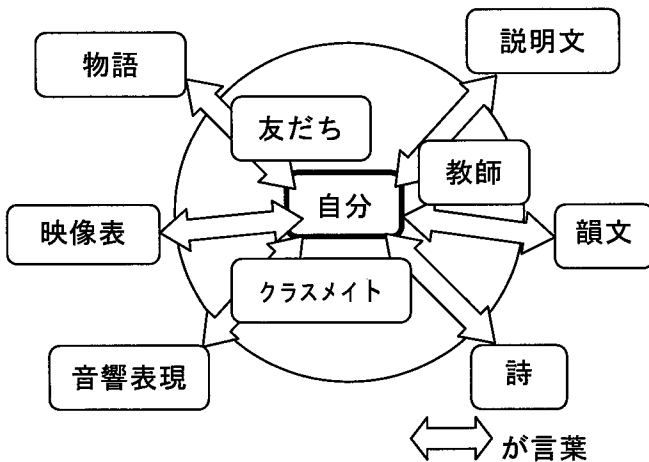
国語部における「自立」とは、児童生徒が広い意味での言葉を通して世界と主体的につながるものと捉えた。そのためには、児童生徒自身が言葉とどのように関わっているのかを自覚するとともに、自分を含めた他を意識することが必要になってくる。言葉は常に他との相互関係の中で生きてくるからである。

そして、国語部では、その手段となる言葉を豊かにすること、対象となる他を意識することをすすめていきたい。

豊かな言葉を用い他者意識が高いと、より良いコミュニケーションを生む。「豊かな言葉」「他者意識」は、集団の中での「協同」によってこそ、育まれる。また、育まれた「豊かな言葉」「他者意識」によって、児童生徒自身の「自立」が促される。協同→自立→協同→自立…の相互作用の中で、

それぞれを、高め合う事ができると考えた。

(授業、単元、学年、校種の全ての場面で考えることができる。)



(2) 新しい自分を創出するためのコミュニケーション

一年次の研究において、附属池田中学校では、言語活動を「学んだ知識を使い、言葉を介して活用していく学習活動」において発揮される力をコミュニケーション力とし、「自分

の思いや考え、体験を様々な他者に伝わるような『ことば』で表現し、また相手の思いや考え、体験を自らのそれと重ね合わせて受容し、相互理解に向けた営みができる力」と捉えた。

本年度、国語部では、この相互理解をより深く捉え、『相互の他者理解』をめざしたい。他者理解というのは、他者には自分とは異なる背景（歴史、文化）があり、異なる考え方や価値観、習慣をもった『未知なる他者』である。そのような他者と関わることで、こちらの知識や考え方を『相対化』して、自らを『外からの目』で見直すことによって、新しい自分を発見し、新しい自分を創出することである。

他者理解のためには、考え方や価値観等今まで自分になかったもの、持っていなかったものへの（表現することも含めての）受け止め方が重要になってくる。

国語部では、この受け止め方を対話と定義し、この対話を通して、新しい自分を創出できると考

えた。もちろん、話し合う中には、情報を送り合う場面、交流することで自分の考えを確認している場面もある。しかし、情報を送り合うことによって、他者の中にある自分にはないものを明確にでき、対話が始まるとも言えるのではないだろうか。

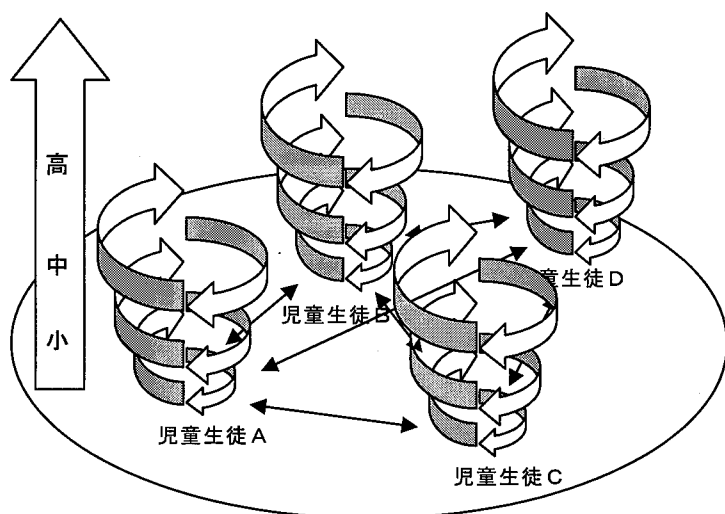
教師の役割は、授業の中で、児童生徒が対話できるような環境、状況にいざなうことである。

例えば、物語の主人公の気持ちを考える場面では、まず、児童生徒は、自分の経験（生活経験・読書経験等）により、叙述から主人公の気持ちを考える。そして、教師やクラスメイトと自分の考えを確認、交流をしていく。

そこで、教師から児童生徒の意見に対して差異のある考えを投げかける。または、自分自身がクラスメイトの意見と差異を見つける。

そうすることで、確認、交流が対話へと変わり、今まで持っていた自分の考えを補強したり、修正したりと、より深く主人公の気持ちを考え直していく創造（新しい自分の創出）を行うことになる。

このように、学習活動の中で児童生徒が対話する機会、場面を設定していくとともに、対話そのものを支える言葉の力を鍛えると言う二本の柱で「自立」を促していきたい。



対話ができる協同の場の設定

※交流だけでは、個人の高まり（自立）は期待できないが、対話を行う協同の場を設定することで、自立が促進される。

【教師の役割】

- 協同の場の設定
- 協同の場での適切な課題設定
対話を促す仕掛けを！
- 協同の場での関わり方の指導
- ◇自己で思考・整理する場の設定
- ◇自己で思考・整理する方法の指導
- 語彙力・表現力の育成

参考：人が世界と関わる三層モデル（学びのドーナツ）

佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』（岩波書店 1995）

（3）対話する場の設定と表現力の向上

一年次の研究は、個で深める課題の設定と協同で高め合うための班を用いた学習・授業モデルを提案した。今年度は対話を意識した単元学習をデザインした。中心となるテーマを設定し、対話による協同的な探究活動を展開、その成果を表現し共有する単元学習である。単元学習の中で、対話が行われる場面において対話を促す仕掛けや、対話や協同的な探究活動における、個々人の関わり方の指導を提案した。もちろん対話をするのが目的ではなく、対話はいくまでも国語の力をつけるための手段である。今現在自分の中にある思考や意見を、音声言語または文字言語で表現するだけでなく、相手の話に耳を傾け、受容し共感し、批判し論じ合い、知恵を寄せ合う中で生まれる思考や意見をお互い理解し、表現する、そのような力をつけたいと考え、実践研究を行った。

2. 実践の概要

【1年】

学校ホームページを企画しよう

授業者 平山ちさと

- (1) 教材 学校ホームページ
- (2) 単元設定の理由

この単元のねらいの一つは、言語表現と写真表現との関わりから意味を構築する力をつけることである。そしてもう一つは、授業の手法として話し合いの活動を取り入れることで、自分の意見をより深め、分かりやすく伝える力をつけることである。

現代の中学生にとって、日頃からインターネットのホームページ(正しくはウェブページであるが、生徒にはホームページという呼び名が親しみあるのでこれを使用する)を閲覧し、そこから様々な情報を得ることはごく身近なことである。しかし、その存在意義や、作り手としての効果的な活用について考えることは少ない。「伝える」ための道具として、ホームページの効果について考え、目的に合わせて自ら構成することは、新学習指導要領の第1学年目標にある「目的や場面に応じ、日常生活にかかわることなどについて構成を考えて各能力を身につけさせる」にも当てはまる学習活動になると考えた。

この単元に取り組むに当たって、まず「学校ホームページ」を開設する意義や留意すべき事、どのような年齢層をターゲットにし、何を伝えるべきかを話し合わせる。つまりホームページという、モニター上の見慣れたものを通して、他者と関わり合うことを意識させる。そして次に、既存のホームページを複数比較検討することで、そこに仕込まれている工夫を見て取り、言語化させる。その中でも特に言語表現と写真表現を組み合わせることで、文章だけでも写真だけでも伝えられない意味を伝えられることを学ばせたい。そうやって一度言語化して学び取った様々な工夫の中から取捨選択し、今度は自分たちの表現の手段としてホームページ作りの中に取り入れていくのである。

この単元で培った力は、今後の様々な表現活動で生かされるだけでなく、韻文・散文を問わず、読解の学習でも生きてくると考えている。

(3) 単元評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む
・課題に関心を持ち、他者の意見や作品を参考にし、自分の意見を伝えようとする。	・ホームページの効果を考えて、自分の意見を伝えることができる。 ・他者の意見を聞き、自分の考えの中に取り入れることができる。	・集めた材料を整理し、目的にあった記事を効果的な表現で書くことができる。	・資料を比較・検討し、特徴を読み取ることができる。

(4) 指導計画 (全8時間)

- 第1次 「学校ホームページを作成する」という課題に沿って、意義・目的・留意事項などを話し合い、クラス毎にテーマと方針を決める。
- 第2次 既存の学校ホームページを複数観察し、効果を検討する。写真の用い方による効果の違いをつかむ。言語表現と写真表現を組み合わせることによって表現の幅が広がることを知る。
- 第3次 グループで作成するホームページの全体構想について話し合う。役割を分担する。
- 第4次 記事を集め、ホームページの下書きが描かれた企画書を作成する。(2時間)
- 第5次 企画書を他のグループと交換し、意見を述べ合う。グループで再度検討する。
- 第6次 前時に受けた意見を取捨選択し、企画書を仕上げる。
- 第7次 クラス内で交流し、代表となる企画書を決める。

(5) 言語表現と写真表現との関わりについての指導

① 仮想ホームページ上での写真の比較 I

パワーポイントを用いて、仮想ホームページを作り、中にはめる写真を7種類用意して入れ替えることにより、写真の違いから受ける印象の違いや活用の仕方を文章で表現させた。



2	1	
一部	全体	観舎の写真
下から上へ	正面から	印象
めいている感じ	まっすぐ	どのような目的に適用しているか
ぎゅっじのおしり	入射してほし	生徒からの感想も知ってほしい

2	1	
美術室 音楽室	校舎を正面から	観舎の写真
感じ	全部うつして	印象
教室内をみ	感じ	どのような目的に適用しているか
教室内をみ	伝統など昔とあまり変えて	教室内をみ

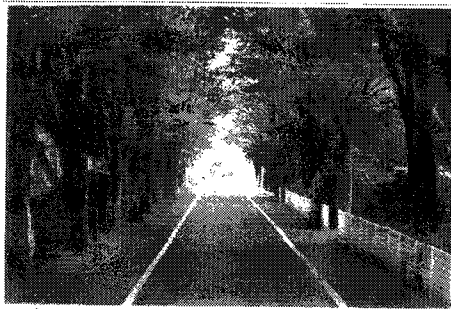
2	1	
ある一部分を集	校舎全体の	観舎の写真
入った写真	ようす	印象
どのような目的に適用しているか	どのような目的に適用しているか	どのような目的に適用しているか



② 仮想ホームページ上での写真の比較 II

生徒のワークシートから ↑ ↓

同じ場所をとった写真に猫が写っているもの・生徒の後ろ姿が写っているものなどの変化をもたせ、ことばをつけるならばどのような違いが生じるかを考えさせた。



緑豊かな学校

大阪教育大学附属池田中学校へようこそ



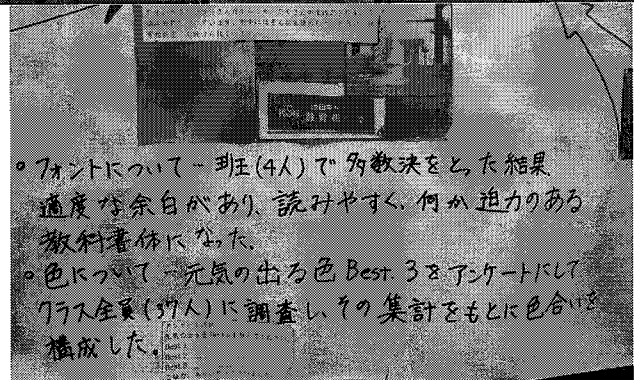
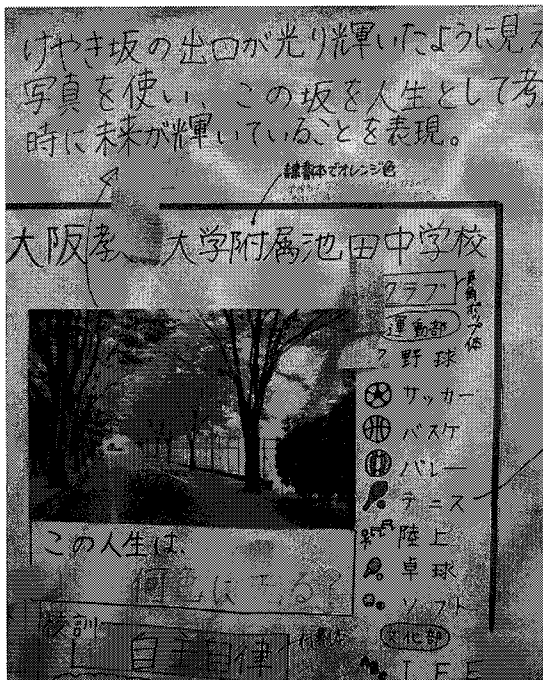
友と共に育む 附中 LIFE //



いっしょに 聖校にみまもり

③ ホームページの企画に写真と言葉の組み合わせを必ず取り入れる。(写真は次のページ)

同じ写真でも、使う目的によって添える言葉が変わる。どのような目的でどの写真を使うのかを明確にし、その写真を使う上でのねらいを説明する言葉を書かせ、紙面に残すようにした。



(6) 話し合いを成立させるための工夫

①話し合いの段階

国語の授業では4人班を作り、話し合いをする際の基盤とした。例えば「ホームページのテーマと、どのような人たちを意識して作るか」を話し合うときも、1人で考える → 4人班で意見を交流し、1つにまとめる → 班毎に意見を出し、クラスで話し合う という段階を踏んで話し合いをさせた。

また、話し合う際は

- ・必ず全員が1回は意見を述べる。
- ・理由とともに意見を述べる。
- ・安易に多数決で決めずに、少数意見でも理由が妥当であれば検討する。

ことを常に意識させた。

グループで作品を交換して意見を出し合う際には付箋を利用し、「良いこと」「良くないこと」「提案」を色分けして書かせ、全員からの意見を集約しやすくすると同時に、意見を伝えた後にも、出された意見が視覚的に意識されやすい工夫をした。

(7) 成果と課題

生徒にとってホームページ作りは意欲をもって取り組める教材であり、話し合いの活動も活発であった。「自分の意見をより深め、分かりやすく伝える力をつける」という目的はある程度果たすことができた。しかし、作業をする上で観点が広がりすぎ、生徒は見栄えの良い作品作りに走りがちで、ホームページ内の文章の質など、国語の活動としての深まりに欠ける結果となった。また、グループで作品を交換しての意見の出し合いも、一方的な批判的対話に終始することになっていた。共感的な対話を成立させるために、いかに観点をしばって話題を提示するかということは今後はさらに研究する必要がある。



【2年】

ニュース番組をつくろう

授業者 今西千景

(1) 単元設定の理由

1年生時「入学説明会で6年生に配布するパンフレットを作る」という単元学習を行った。ねらいは、相談や話し合いを中心にした協同作業の中で、書く力をつけることであった。その単元では、一人ひとりに話し合う前に意見を持たせ、話し合う内容と順序を示したワークシートを考案できたこと、話し合いにおける意思決定のルールを提示できたこと、ふせんを活用して話し合いの途中を記録に残せたこと、これらによって話し合いをスムーズに活発に行うことができたことが成果としてあげられる。しかし、ねらいとした書く力がついたかどうかの点で、評価規準があいまいであったこと、文章作成の役割分担も明確ではなかったため、一人ひとりの到達度がはっきりしなかったこと、が課題として残った。そこで、2年時の今回の単元では、1年時と同じく「相談や話し合いを中心にした協同作業の中で書く力をつけること」をねらいとし、前回の反省をいかしたものにしたいと考えた。まず、実際のニュース原稿の特徴を読みとる学習をした後、評価規準を提示することで、生徒が相互評価をする際の規準を統一した。また、一人ひとりに原稿作成の役割を与え、協同で文章を練り上げる活動を設定した。

(2) 単元指導計画（全14時間）

- 1次 ニュースやニュース番組の形態について考えさせる。
- 2次 情報（映像）編集のしかけや効果を考えさせる。
- 3次 ニュース原稿の特徴を考えさせる。
- 4次 ニュース番組作成の手順と評価の観点を提示する。
- 5次 企画会議
- 6次 編集会議、編集作業（4時間）
- 7次 リハーサル（2時間）
- 8次 本番（2時間）
- 9次 ニュース原稿の自己評価と他者評価

(3) 評価規準

生徒に提示した評価規準は以下の通りである。

話す	① 予定の時間でニュースを読むことができる。
	② 聞き取りやすい発音、間、速さでニュース原稿を読むことができる。
聞く (班)	③ インタビューから得られた内容を、インタビュー相手の意志を尊重した形で使用したニュース原稿を書くことができる。

話し合う(班)	④ニュースの内容に公共性や品性がある。
	⑤ニュースの素材やニュースの切り取りに新しさや独創性がある。
	⑥ニュースで扱う人や自然やモノに配慮がある。
書く	⑦印象表現を多用することなく、ニュース原稿を書くことができる。
	⑧接続助詞を多用することなく、単文を主体としてニュース原稿を書くことができる。
	⑨文末を敬体表現でニュース原稿を書くことができる。
	⑩「起こったこと」「わかったこと」「これからのこと」を中心に、事実と感想や意見を明確に区別してニュース原稿を書くことができる。
	⑪主題（ニュースで伝えたいこと）が統一されたニュース原稿を書くことができる。

(4) 対話する場の設定

ニュース番組作成にあたり、以下の条件を提示した。

- 附中の出来事をもとにしたニュース番組
- 4(5)人班で一つのニュース番組
- 5分のニュース番組
- 全員が何らかの形でニュースを読む。
- ニュースの話題の数は自由。
- ニュースの形態は、学校でできる範囲のものならどの形態でもよい。
- 評価規準にてらして作成する。

班でニュース番組をひとつ作成する活動としたので、班のメンバーとは意見交換や意見調整を行わなければならない場面が必ずある。企画会議では、班員全員が案を持ち寄って話し合いが始められるよう、まず個人で考える時間をもった。その後班になって、「それはニュースと呼べるものか」「ニュースとして価値があるのか」という点で話し合い、ニュースの内容を決めた。編集会議では、全員が何らかの形でニュースを読むことになっているので、どのニュースを読むかを役割分担した。次にそれぞれのニュースにかかる時間や順番を考え、番組構成表を作成した。その中で、「ニュース番組のあり方」を考える話し合いが行われた。ワイドショーや情報番組との違い、「やらせ問題」などについて言及している班も見られた。その後の編集作業は班員同士で相談しながら作業を進めた。ニュース原稿を書くのは個人の活動であるが、自分の文章を班員に見せて推敲していた生徒も多くみられた。リハーサルでは、ペアになる班を決め、相手の班のリハーサルを見て、評価規準にてらしたアドバイスをする時間をとった。全員がアドバイスをし、全員がアドバイスをされる活動である。本番では、発表班以外の班が評価表に評価を記入し、発表班にその評価表を渡すという活動も行った。また最後に、ニュース原稿の自己評価と他者評価を行ったが、これもプリントに書かせる活動であった。これらは音声での対話ではないが、文字を使った対話的な活動にあたるかと考えている。その他、取材・調査活動において、インタビューやアンケートを取るために相手に依頼をする場面なども対話的な活動と言えるだろう。

(5) 実践を振り返って

生徒のニュース原稿

ニュース原稿の特徴をとらえた学習をいかし、最初に「新聞記事でいうところのリード文」のような5W1Hを意識した簡潔な一文を書いている。

キャラクター	秒	時間	原稿	備考
	18	16	次のニュースです。今日、大阪教育大学附属池田中学校の体育館で、生徒集会が開かれ、生徒総会から今後の学級ボール保管方法について説明がありました。	バド ショット
	30	48	学級ボールは今年度から各学級が昼休みに自由に使用できるようになり、げたは二横の棚で保管されていました。しかし、以前からルールを守らずに他の学級のボールを使用し紛失する、時間内に返却しないなどの問題が深刻化していました。今回、バレーボール、サッカーボール、計24球の内、半数がなくなっていました。一週間の使用禁止になっていました。	ビデオ 消音
	42	40	インタビュー	ビデオ
(声)	25	115	このことについて、どのようにすれば、学級ボールをルールを破って使用が減るか、各学級で話し合いが行われました。話し合っていて、結果は生徒会が再度話し合われ、結果、各学級のロッカーで鍵をかけて保管することになりました。	ビデオ 消音
(カット)	20	135	インタビュー	ビデオ
(声)	16	151	また、ロッカーの鍵は、教室の鍵と共に保管され、各学級の学級ボールは、学級委員長が責任をもち、ことになりました。今後のボールの扱われ方が注目されます。	ビデオ 消音
			以上、ニュースでした。	バド ショット

カット	秒	時間	原稿	備考
4. 食堂 (1) 導入			2月13日～2月24日の2週間、附高食堂では「井ぼりフェア」が行われ、至る所「井ぼりフェア」は、カツ丼、中華丼、親子丼、かつお丼など、350円程度で販売されています。至る所、附高食堂では、こんなところのしょう油、こしょうは附高食堂の生徒会の方に伺ったもので。	映像 音なし
(2) 解説			まずはオーストラリアのニュースについてです。(1)日は(めい)附高で、20日は(めい)日替わり定食というんです。沖に行くと、これは何かが何うか、(めい)たまたまお客様が来た(めい)美味いと言ったところなんです。新しい大変、客員に20日(めい)同様に限られた(めい)食料を(めい)20日(めい)食料を(めい)限られた(めい)日替わり定食(めい)美味い(めい)作られたというんです。最後に1番混雑日(めい)は(めい)水曜日(めい)イベントの時は行います。	リリック

この生徒は、自己評価の時に段落構成に着目している。「起こったこと」「わかったこと」「これからのこと」にわけてみたとき、「これからのこと」が述べられていないことに気がつき、結局何を伝えたかったのかがあいまいであったことを理解した。

①②④は出来たと思うけど、③⑤で、井ぼりフェアのことを伝えたのか、附高食堂について伝えたのか、(?)でいいのじゃないかと思った。井ぼりフェアについて伝えたことと決めたのは、附高食堂の説明をした後に、「ぜひ井ぼりフェアに行ってください」といった内容の文を入れた方が良かったかもしれない。

2. ゴミ			今日初めのニュースはB組のゴミ箱につかいます。B組のゴミ箱は、汚いと言われているが、実際どうなのでしょう？私たちがB組のゴミ箱がどのような様子か見に行きました。	1分
			B組のゴミ箱は、ゴミ箱 周辺にゴミが落ちていて、本当に汚いかな。このように汚いのはなぜなのでしょう？この事理解するため、取材を行いました。まずはA組、B組の方にゴミ箱のゴミ箱についての取材です。	1分

この生徒は自己評価に「印象表現はあまり使わないようにできた」と書いているが、「そんな」「本当に」「汚い」といった語を使い、自分の感情や価値判断を出してしまっている。「形容詞や形容動詞、連体詞、副詞を使わないようにする」ことを指導しきれていない。ニュース原稿の特徴をとらえるとき、使用されている品詞を分類するなど、もっといいねいな指導が必要であった。

印象表現は、あまり使わないようにできていたが、接続語をたくさん使ってしまった。と思います。起こったこととわかったことというより、自分たちが思ったことや、気付いたことを中心に書いてしまっていたなと思いました。

カット	秒	時間	原稿	備考
	1秒	1秒	こんにちは、附中ヒビ及の時間です。	〇〇〇んと 〇〇〇
ズライト ショー	27秒	28秒	〇〇〇の後に、2秒程 ここ二週間程寒波が続きました。附属池田 中学校でも、中庭の池に氷がはるほどの冷 たさです。氷は糸約3cmで、雪が降る日 が続きました。	
	25秒 (17秒)	53秒 (1分)	これから気温の変化が激しい日々 が続く、体調を崩す人が増えていま す。カゼの予防対策のアンケートを附中の2年 生にとりましょ	〇〇〇秒 (17秒)の中 に〇〇〇 の〇〇〇
			これから、カゼ予防に手ぬかかけにしが 大切になりそうです。	

自己評価の後、他者評価を行
った。原稿の具体的なことば
に注目して指摘できる生徒
もおり、その指摘は原稿を書
いた本人だけでなく、他の生
徒の目にもふれる。そこでま
た学びがあることを期待し
て行った活動であったが、生
徒任せであったことは否め
ない。指導者はまず、典型的
な生徒のニュース原稿をい
くつかとりあげ、実際の評価
活動をクラス全体で練習し
ておくべきであった。そうす
ることで、より有効な評価活
動が行えたであろう。

最初に言いたいことが書かれていないから、
あまり接続助詞を使用せず、単文で「言わせていただきます」
「中庭の池に氷がはるほど」で一人半断を終わらせる表現が望ましい。

カット	秒	時間	原稿	備考
ズライト	20	106	はい、よろしくお願ひします。私は、昨年のバレンタ インで、65期生に男女別々のアンケートを取りました。 最初に見て感じたのは、このグラフです。 昨年のバレンタイン、誰かに何かをあげた女子、 もらった男子の割合を調べたところ、グラフが示 しているように、あげた女子は98% にものぼるのに対し、それに対してもらった男子 は半数しかいません。	〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇
ズライト	15	141	それに関連するものとして、このグラフは、実際にあげ た女子の人数、もらった男子の人数を表したものです。 女子は、あげたのは、31人以上、男子は51人以上 の割合が最も多い、という結果になりました。	〇〇〇〇〇
ズライト	17	170	正直男子には、悲しい行事と考える人も あまりバレンタインを重視していない人も 多いように思われます。	〇〇〇〇〇
ズライト			続いて、そんな女子がお菓子を作るのに かかる時間と費用のグラフです。 費用では、5000円以下がほとんどの中で、100 1万以内以上もいた人がいたようです。 また、かけた時間は、1.6時間から半日と かなり長い時間をかけて作る、というこ ともよく見られます。	〇〇〇〇〇

この生徒は「バレンタインデーが近い」ことから「バレンタインデー」
の話題を担当した。学年にアンケ
ートをとったり、グラフを書いた
フリップを作成する等、熱心に活
動したが、発表後、「ニュースとは
何か」と悩んだようであった。そ
れはこの単元を通じて繰り返し指
導者が問うてきたことであつた
が、大半は「視聴者にうける(ク
ラスメイトにうける)ニュース番
組」になりがちであった。実際多
くのニュース番組がワイドショー
化しており、「情報番組」との区別
もつきにくい。学習者が作り手
になることで、情報は意図をもつ
て再構成されていることを感じる
ことができたのではないだろうか。

①ニュースは、「起こったこと」が中心かな、と思つてたのに、原稿はバレンタ
インのアンケートの話で使ってしまった気がする。アンケートは導入として使うのは、
いいと思うが、アンケートには、12言のたのびで、
終わつたので、内容が薄いかな、
なつてしまったのか、反省した。

【3年】

俳句の世界 ～「俳句甲子園」附中版で伝え合う力を高めよう～

(1) 単元設定の理由

本単元での目的は俳句を読んで古典に親しみながら、俳句を用いた話し合いにおいて伝え合う力を高めることである。特に、つけたい力として学習指導要領の「話すこと・聞くこと」における指導事項の「自分の経験や知識を整理してまとめ、説得力のある話をする」とする。俳句の景を伝えるために自分の経験や知識を再構成して伝え、その根拠を明確にして表現することが説得力となることに気づかせたい。中学校では「話すこと・聞くこと」について、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ意見を述べ合うような言語活動を通して指導するものとする。さらに、高等学校では古典の取り扱いのなかに「話すこと・聞くことの言語活動を効果的に取り入れるようにする。」とある。よって「話すこと・聞くこと」の言語活動として作句と俳句を用いた話し合いは、この言葉によって伝え合う能力の継続的な育成に最適な教材となりうるものとする。本時は、「俳句甲子園」の形式を用いて5人対5人の団体戦による討論形式で話し合いを行い勝敗を決する。そして、中学生と高校生との話し合いの場を設定する。自分の伝えたいことの根拠を即座に掘り、想いを込めて表現するこの活動は生徒の伝える合う力を培うと考える。また、相手の想いや考え、体験を自らのそれと重ねて受容する力の育成にもつなげたい。

(2) 指導計画 (全11時間)

第1次：芭蕉と李白について比べ、景の中に感情が表われることに気付かせる。(3時間)

第2次：「春」をテーマに写真を撮り、写真を選ばせる。(2時間)

第3次：「春」をテーマに俳句をつくらせる。

第4次：班で俳句を三つ選ばせる。

第5次：俳句甲子園附中版 (全3時間 本時はその2時間目)

第6次：振り返りとまとめを行う。

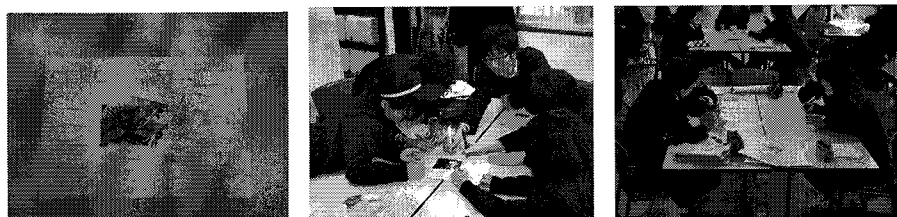
(3) 評価基規準

言語への関心、意欲、態度	俳句に関心をもち、他者の意見を参考にして、自分の意見を伝えようとする。
話す、聞く能力	自分の経験や体験を相手にわかる言葉で伝えることができる。 他者の意見を聞き比べて、理由を述べながら、どの意見が説得力のあるかを評価することができる。
書く能力	自分の感じたことに適する言葉を選んで書くことができる。
読む能力	俳句の景を思い浮かべ、自分の言葉で表現できる。
言語についての知識、理解、技能	説得力を感じさせる語句の使い方や表現に注意して聞いている。

(4) 対話する場の設定

①班での活動

班内で対話の場面を設定した。班で「春」をテーマに撮影し写真を選ぶ活動をし、写真の構図を考え撮影した中からテーマに合うものを三枚選びデータとして残すようにした。写真を一人一枚ではなく班で三枚としたことで班内での対話を設けた。次に撮影した写真から言葉を起こすため、シートの中真ん中に写真からイメージできる言葉を貼り付せんに書いて貼り、他者の言葉を見て自分の意見と比べた。試合に用いる写真を班で一つ選び、たくさんの言葉から俳句づくりを始めた。班でできた五つの俳句を試合で用いる三つに絞る活動では、それぞれの俳句について自分の詠みと他者の意見の交流を行った。また、班内での練習試合を行い意見・視点を用紙にまとめた。



②ワークシート

俳句を多面的に捉えるために、練習試合で出された句についての意見をワークシートに「良いところ」、「改善点」と分けてまとめた。良い点は句の説明として、改善点は相手チームの質問されるであろう意見として記入し、試合の準備とした。

(5) 実践を振り返って

①生徒の感想

- ・ 日本文化は繊細であり、また力強いものであると思った。季節が変動するだけで、その中の文化も変動するが、昔できた古い言葉や感覚は今でも日本人が持ち合わせ続けることができている。
- ・ 日本の文化はことば文化である。日々他国語を勉強したり、また今回の授業でもこのことは深く感じた。だからこそ、四季にめぐまれた私たちは言葉をただのコミュニケーションツールとしてではなく、そこに自然や物の美しさをそえて、自分の気持ちを伝えるのではないか。

②成果と課題

中学生と高校生にさまざまな文献資料を提示し、中学生と高校生間の話し合いの場をもつことができた。また、生徒は自分の経験や体験を述べることができていた。伝わらないときは、違った体験を語るなど工夫してさらに伝えようとする姿勢も見えた。

しかし、対話において中学生の発言は抽象的な言葉が発言の中に多くみられた。つまり、中学生が日常会話として用いる「～的な」「～感じ」という発言や「はっきり」「しっかり」など感覚的な言葉が目立った。議論をさらに充実させるには、事前に生徒一人ひとりが「春」についての考えや感じ方を経験や体験に基づいて捉え、実感できる言葉で表現する活動を教師が取り入れるべきであった。

そのために、風景を写真として切り取り、言葉に起こしていく段階で、生徒の「春」のイメージをより具現化するための教師からの指導や生徒の話し合いの場の設定がさらに必要であった。その活動を踏まえ、班内で「春」の捉え方について対話を重ね、他者からの視点をとおしてさらに深めれば授業は「春」の捉え方についての議論となって焦点化し、授業の深まりが得られたと考える。

3. 成果と課題

対話の場面を意識的に設定し、協同の中で表現力を身につける単元学習のモデルは提案できた。しかし、どんな話題でどんな言葉を選び、どんな話し方で対話が行われているのか、授業者の分析が不十分であったことは否めない。少人数での対話がなされる前に、授業者と学習者の間でモデルとなる対話をクラス全体に示しておくことが不十分であった。また、学習者同士の対話を教材にして形成的評価を行いながら指導することも不十分であった。言語活動は充実していても、言語のどんな力をつけるのかがあいまいであれば、「活動あって学習なし」である。また、指導者がつけない力を焦点化していても、その力をつけるための細やかな手引きと評価規準がなければ、ゴールは生徒任せになってしまう。あたりまえのことであるが、手引きと評価規準は深い教材研究からしか生まれない。

各学年で系統的に身につけておくべき対話能力の整理であるとか、対話能力そのものの評価であるとか、これから整理していかなければならない課題は山積みである。



実践事例 3 年：「俳句甲子園附中版」の授業風景



実践事例 2 年：「ニュース番組をつくろう」授業風景



編集されたインタビュー映像